

氏 名	鍵 谷 寛 佑
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（歴史学）
学 位 記 番 号	甲文第167号（文部科学省への報告番号甲第574号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2016年2月26日
学 位 論 文 題 目	近代スポーツの形成とイギリス競馬 ー競馬統括団体ジョッキー・クラブに関する考察を中心にー
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 田 中 きく代 （副査） 教 授 中 谷 功 治 秋 田 茂（大阪大学大学院文学研究科教授） 川 島 昭 夫（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

論 文 内 容 の 要 旨

鍵谷寛佑氏の学位請求論文である本論文は、18世紀中頃に成立した競馬の統括団体であるジョッキー・クラブについて論じることで、スポーツ史から19世紀のイギリス社会を紐解こうとするものである。この時期、イギリスでは数多くのスポーツが発展し、スポーツによるクラブやアソシエーションなどが生まれた。それらは同時期におけるイギリス社会の多様で複層的な様相を映し出すもので、階級間の対立や融和の状況や、それぞれの娯楽空間での文化形成の有り様を垣間見せるものである。特に競馬は、そうしたスポーツの代表格であり、時代の変遷と共に王侯貴族のものから、中産階級、労働者階級と、全階級を包含するようになる娯楽で、しかも、地域社会のローカルな側面、ナショナルスポーツの側面、またイギリスの帝国化と共に植民地にも輸出されるインペリアルな側面をも有するものである。

鍵谷氏は、こうした競馬を研究テーマとし、特にその統括団体であるジョッキー・クラブの成立から確立までを検証している。競馬は、次第に中産階級、やがては労働者階級へと裾野を広げていくが、貴族などの社交クラブとして始まったジョッキー・クラブは、クラブの構成員、馬主などを数量分析することで、中産階級によるクラブへの参加は見るものの、クラブの閉鎖性は残され、「貴族性」は維持されたと論じる。また、グランド・スタンドやベッティング・プレイス（賭けの場所）などの社交の場で、階級間の融合もある程度見られたが、空間分離によって階級の切り分けの装置が働いたことを指摘している。さらに、クラシック・レースの成立や、サラブレッドの血統の重視は、「貴族性」の洗練を通して、「イギリス意識」による全体的な統合を生み出すものであったこと、同時に、競馬は上流階級、中産階級、労働者階級の階級それぞれの独自の娯楽を生み出したことも主張している。

鍵谷氏は、19世紀末までの、ジョッキー・クラブの発展・確立の過程を、先行研究に基づきながら、その揺籃期（1773年頃まで）、初期発展期（1835年頃まで）、後期発展期（1848年頃まで）、確立期（19世紀末まで）と定めているが、本論文はそれに従って展開される。すなわち、本論文は3部立てで、序章の研究史と終章の他に7章からなるが、第1部は「近代スポーツとしての競馬の成立」で、第1章「ジョッキー・クラブの揺籃期」、第2章「ジョッキー・クラブの初期発展期」、第3章「18世紀から19世紀前半にかけての競馬の変化」から構成される。第2部は「競馬によるネットワークの進展」で、第4章「ジョッキー・クラブの後期発展期」、第5章「ジョッキー・クラブの「確立期」」から構成される。第3部は「競馬に見る階級性と賭け」で、

第6章「競馬の賭けが有する意義」、第7章「近代イギリスにおける「賭け」とその規制」から構成される。

第1章では、クラブの成立状況と共に、メディアの役割に注目し、『競馬年鑑』の創刊を重視している。これには、レース情報以外に、購買者リスト、クラブの規則、馬主リスト、種牡馬広告など多岐に亘る情報が掲載されている。こうした情報を検証していくことで、全国的にネットワークを広げ、クラブが統括団体として成長していく様相を捉えている。第2章では、バンバリー卿の組織改革、血統登録書の発刊などが論じられる。ことに、サラブレッドの血統が重視され、サラブレッドを所有することが高貴さの象徴となり、中産階級の社会的上昇のステイタス・シンボルになったと論じる。第3章では、3歳馬限定レースであるクラシック・レースの成立と血統の問題が論じられ、競馬が一大娯楽となり始めるにつれ、競馬は「貴族的」要素と、スポーツとしての「近代的」要素が融合する特有の形態を生み出していったとする。

第4章ではベンティング卿の改革を中心に、世紀の中頃に、公平性やエンターメント性を重視する、スポーツの近代化が推し進められたことが論じられる。全国展開への手はじめとして地方のグッドウッド競馬場での実験的試みにも言及され、公平性では、雌雄・馬体、経歴を考慮した斤量（ハンディキャップのため）、ジョッキーのユニフォーム、パドックなど諸改革が指摘される。エンターメント性のひとつとしては、グランド・スタンドの設営がある。観客が見やすいように、ゴール前に設営されるが、高貴な者の場所など、区割りされたことも指摘される。遠距離を運んでの、馬に疲労を与えにくい馬運搬車の導入も、全国化という点で重視されている。第5章では、19世紀後半のラウス大佐の改革を中心に、労働者を含めた、文字通り「全階級的」なスポーツになる様相を論じる。また、ネットワークを広げ、全国的な団体に変貌する様相を、メンバーシップの分析によって、精緻に検証している。

第6章では、上流階級の賭けと労働者階級の賭けの相違を述べ、19世紀の後半に、中産階級のさらなる台頭に仕掛けて、労働者の賭けがギャンブルとして社会問題化され、悪として処罰の対象となることが論じられる。上流階級の賭けは競馬場の特権的空間でなされ、労働者の賭けがブックメーカーによってなされるようになり、全階級が参加する競馬ではあるが、賭けの場は空間的に分離されていたことが指摘される。第7章では、19世紀中頃から始まってくる路上法など、労働者の賭けを処罰する傾向が、19世紀末からの社会改革の動きのなかでは、中産階級主体の全国反賭博連盟などによって促進され、20世紀初頭には封じ込められるようになることを論じている。

19世紀の競馬の歴史を紐解き、ジョッキー・クラブという競馬の統括団体の展開を検証することで、社交や娯楽の視点を重視ながら、19世紀イギリスにおける、階級の有り様を時間軸に沿って具体化しようとした論文である。

論文審査結果の要旨

本論文は、イギリスにおけるスポーツの代表格である競馬に注目し、その統括団体であるジョッキー・クラブについて考察するものである。この意味では、スポーツ史の論文であるが、本論文はそれにとどまらず、スポーツ史の枠を超える、社会史的あるいは文化史的試みであると評価できる。近代化のプロセスでのスポーツの有り様を検証することで、19世紀のイギリス社会の階級性について実証的に論じようとするもので、きわめて意欲的な論文であると言える。史料としては、メディアの側面に関心を持ち、ジョッキー・クラブの発信媒体であった一次史料『競馬年鑑』Racing Calendar や、『血統登録書』を丹念に読み解いていて、それが論文を説得力のあるものにしている。問題提起に終わらず、史実を吟味し、それを具体化した点で、オリジナリティのある研究である。

さらに、より具体的に、本論文において評価すべき点を示すとすると、まず第1に、スポーツに、その中でも「全階級的」な競馬に注目し、しかもその社交クラブであるジョッキー・クラブに焦点を当てて研究し

たことにこそ、独創性がある。先にも述べたが、スポーツの歴史を、社会史、文化史に昇華させる可能性を指し示す論文であることが評価できる。つまり、社交や娯楽を通してイギリス社会を見ることを実際に具体化したことが評価できる。

第2に、貴族から一般へといたる競馬の参加者の対立と融合の様相を、クラブの構成員、馬主、購読者を数量的に、データを一つ一つ丁寧に拾い上げ、階級、中心と地方などの要素によって分類し、実証的に示したことがある。また、単に量的な分析にとどまらず、それらを空間的な分析に発展させていることも評価できる。賭けにおける上流階級と労働者階級の差異の指摘にも関心が持てる。

第3に、サラブレッドの血統の重視と貴族性を結びつけたことに独自の視点があり、それがイギリス本国のみならず、他国、特に植民地にももたらされることの示唆は、今後研究がさらに進められるべきテーマとしてではあるが、研究の膨らみを実感させるものである。

評価すべき点を述べてきたが、本論文にも限界や未熟な点がないわけではない。第1に、全体として、1世紀間を扱わざるを得なくなったがゆえに、それは多くの面で今後の研究の方向性を指し示す上で有意義ではあったが、多少叙述的にならざるを得なかった点が惜しまれる。ジョッキー・クラブの発展にとっての立役者であった、初期のチャールズ・バンベリー、中期のジョージ・ベンティンク、最盛期のジョン・ラウスといった3名の活躍を中心にまとめ、論文をわかりやすく展開している点は高く評価できるが、ジョッキー・クラブの歴史的意義を問う点では、やや説明不足にならざるをえなかった面がある。

第2に、数量分析が基本となっているが、それは評価すると共に、若干の修正を必要とする。馬主、購読者の分析は母体が多いがゆえに、客観的なデータの抽出に成功しているが、クラブのメンバーの分析は、60から80人程度なので、その変容を問うには、メンバーひとりひとりのプロソポグラフィ的研究による補完が必要ではなかったかと指摘できる。

もっとも、これらの問題点は、先に述べた評価すべき点が、それぞれ独創性が高いだけに生じたものでもあり、本論文が現時点で内包する限界であるといえる。その克服は、今後鍵谷氏が研究者としてさらに発展していくうえでの課題となろう。このことは、2016年2月16日に実施された公開審査会の口頭試問で審査委員が質した質問に対しての返答から考えるに、鍵谷氏自身が今後の課題として自覚しているという感触を得ている。いくつかの問題点を提示したが、それらを勘案しても、本論文は博士論文としての条件を十分に満たしている。本論文審査委員4名は、論文の審査ならびに公開審査会での口頭試問の結果により、鍵谷寛佑氏が本論文によって博士（歴史学）の学位を受けるに値すると判断し、ここに報告する。